

氏 名：坂 口 千 鶴

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 4 0 号

学位授与年月日：平成 2 2 年 9 月 3 0 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：老年期にある親を看取った看護師の葛藤

- 娘として、看護師として -

Conflicts of Nurses in Caring for their own Elderly Parents
at End of Life

- As a Daughters and Nurses -

論文審査委員：主査 川 嶋 みどり

副査 濱 田 悦 子

副査 河 口 てる子

副査 武 井 麻 子

副査 守 田 美奈子

論 文 内 容 の 要 旨

【研究目的】

現役の看護師が老年期にある自らの親を看取る際にどのような葛藤を経験し、どのように親の死を受けとめ、そしてその経験は看護の実践にどのように影響しているかを明らかにする。

【研究方法】

質的記述的研究方法を用い、面接を中心に参加者がどのように経験に意味付けをするかを明らかにするナラティブ研究方法を用いた。参加者は 40 歳以上の現職看護職者 4 名で、データ収集は、各参加者それぞれに対して 1 回約 2 時間程度の非構成的面接を 2 ～ 3 回行った。そこで得られたデータを文節に分けて深く読み込み、参加者が抱える葛藤について検討した。

【倫理的配慮】

研究参加者に対する書面による口頭説明の後、署名にて承諾を得た。個人情報に関しては、個人が特定できる部分は抹消すること、鍵のかかる書架で保存すること、関係者以外には目に触れないこと、この研究以外には使用しないことを説明した。研究結果を公表する際には、必ず参加者に分析結果の内容の確認を依頼し、不都合な内容を削除あるいは修正し、外部への公表を辞退することもできることを説明した。本研究は、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

4 名の参加者は 40 歳代から 50 歳代の女性看護師で、20 数年以上の経験を持ち 60 歳代後半から 80 歳代の実母(脳神経疾患、悪性腫瘍)を 1 年から 8 年看護し、死別後 1 年半から 7 年経過していた。参加者の氏名は仮名とし、個人情報保護のため一部内容に変更を加えた。4 人の看護師が語っ

た母親を看取ったストーリーから明らかになった悔いや葛藤の体験は次のようである。別所さんの場合 - 母が父のケアを優先して自分の治療拒否をしたことを娘として認めてしまい、一方、看護師として他の治療方法を選択することを考えながら、自分の家庭の事情から積極的になれなかったことへの悔い。そして終末期の母親の大きな呼吸に、母のもっと生きたい思いを感じて、娘としても看護師としても母の選択を閉じてしまったことへの罪悪感が残った。堀田さんの場合 - 母のそばについていたいと願う一方で、仕事を継続したい思いも強くあった。遠くに住んでいたため毎週帰省していたが、次第に衰弱していく母を看取するためには、仕事を辞めるか休職をする以外になかったが、それもできず、結局誰からも看取られずに母は突然亡くなり、自責の念が強く残っている。

安藤さんの場合 - 疑問を残したまま胃瘻増設をした直後に容態悪化に気づいたが、夜間のことであり、看護師としての立場からスタッフへの遠慮が先立ち医師への連絡もせぬままに過ぎた。翌日、母は緊急手術後死亡してしまっており、看護師である自分を否定する感情につながった。代田さんの場合 - がんで余命半年といわれた母の気持ちを自身で確認できなかった。CNSを通じて在宅で過ごしたい母の真意が明らかになったが、結局母は在宅に帰ることなく病院で亡くなった。看護師として他人のことは理解できるのに肉親の母のことに限っては、その死すらも認められなかった。その後、学生が受け持った患者を通して母の看取りを追体験することになり、母の場合にもっと看護師として積極的に関わるべきではなかったかと悔いていた。

この4名の看護師の語りから得られた核となるストーリーラインから、その共通性と相違性を比較、対象者の属性との関連を含めて分析した結果、親の看取りにおける看護師には三重の葛藤があること 肉親の死を冷静に捉えられない娘としての自分 親の死に対する看護師であるがゆえの娘の自責感が浮き彫りになった。

【考察】

1) 親の看取りにおける看護師の三重の葛藤

老年期にある母親を看取った看護師、特に、家庭のある看護師が、実の母親を看取るということは、三重の役割葛藤を抱えることになる。老年期にある実の母親を看取った看護職者は、自らの家族の生活、仕事、そして母親の看護との間でバランスが崩れ、ワーク・ファミリー・コンフリクト(仕事と家庭の両立葛藤)に直面していた。第2の役割葛藤は、「娘の立場」と看護師意識との狭間での葛藤である。娘として行動したい思いを看護師の立場から抑制する結果、母の入院施設の医療者に遠慮して真実を聞くことも意見を述べることもできず葛藤していた。さらに、生涯にわたって続く母娘の密接な関係に関連する葛藤では、母親の意志に添った看護のできない罪悪感を持ちつつ、せめて母親が自分の意志を表出し甘えて欲しいと願っていたが、長年離れて暮らしてきた母娘の関係性の中では、自分自身も甘えられず、両者ともに葛藤していた。

2) 肉親の死を冷静に捉えられない娘である自分

予想しない別れを理解できないまま死に直面した参加者は、怒りや絶望の感情を引き起こすことになる。ある程度予測されていた場合でも、それまでの専門的な知識や経験が結びつかず、その死を認めきれない思いとなっていた。それは母の死に出会った「素」の娘の傷つく体験でもあった。また「娘としての自分」が、大切な親を守れなかった「看護師である自分」に対する怒りでもある。親を亡くした喪失感は、どんなに成人した者でも非常に大きいと思われる。そして、その辛い体験を押し殺したまま忌引きの短い休暇を終えて元の家庭生活に戻り、看護師としての

仕事に復帰しなければならない参加者らは、自らの感情を抑えて仕事や生活に没頭することになるが、それが、母の死を認めきれない葛藤として心の傷にさえなっていくのであった。

3) 親の死に対する看護師であるがゆえの自責感

母親の死後、参加者達は「看護師」として自ら行った判断に対しての悔いを残し、経験や知識のある「看護師としての自分」を否定する感情すら生じていた。その気持ちを癒すことなく職場に戻った参加者は、死に逝く患者を看護し、また、現場で看護師や学生を指導することになり、再び母を看取った体験を無意識のうちに重ねて追体験することになる。こうして、二重の悲嘆の中で看護職者の残酷さを感じるようになった。

研究では、参加者がしばしば絶句したり涙ぐんだりして言葉にならない場面もあった。研究者自身もまた、本研究を通じて父親の死に直面したときの体験の意味づけをしながら、自身の葛藤の根源に気づくことができた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、父親の死別体験に意味づけをできぬまま、10 年余にわたり後悔や罪悪感を払拭できなかった研究者自身の葛藤が契機になって行われた研究である。当初は、そのこと自体をあまり意識せぬままインタビューを行っていたが、ナラティブデータを繰り返し読みながら、研究者自身の参加者への感情移入から、しばしば参加者の深い思いに踏み込めない状況があったことを想起し、それが、研究者自身の長年にわたって抱えてきた父親への思いと重なっているためであることに気づいたのであった。

研究は、看護職者である娘が実母の看取りに際して感じた思いや経験から、そこにはどのような葛藤があったのかを、4 名の現役の看護職者のナラティブにより明らかにした。先行研究の殆どない状況のもとで明らかになったことは、娘の役割と看護師の役割との相克だけではなく、既に確立している参加者自身の家庭での役割との三重の葛藤があることが浮き彫りにされた。客観的には、職業人として過去にしばしば“人の死”を体験しているが、そのことは実母の死に際しては、むしろ外傷体験や共感疲労として語られ、ある参加者に“看護という仕事は残酷”とまで言わせている。恐らくその根源には、職業を持ち家庭を持った女性という面に加えて、看護の職場風土に根強くある個人的な事情を犠牲にしても、公的な面をおろそかにしないと言った看護師特有の状況や、死別体験後に、再度、“死の場面”に出会い、それを回避できない職業的な立場がある。これまで一般に、看護師の個人的な体験は、その後の看護実践に役立つと信じられて来たが、今回の参加者によって語られ、あるいは語られなかった実母の看取り体験を通して、心の奥深くに残る辛い体験が必ずしもその後のケアに対してプラスの体験になるとは限らないという点は、本研究でのオリジナルな点であると評価された。研究参加者が4名という限られた状況のもとで出された結論ではあるが、肉親、とりわけ実母の看取り体験から、これまでにない視点と結果を提示することになったことは評価できる。

博士学位論文審査専門委員会では、審査の結果、本論文を学位規程第3条により、博士(看護学)の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。